

中央情報通信

発行日 毎月15日

大日本生産党機関紙

第1337号 平成29年3月15日

2・3月合併号

	トランプ大統領が世界大変動のスイッチを押した …………… 本紙編集部…… 1
寄稿	「君は誰なのか」を考える時代になった …… 「兵庫通信」代表 村上 学…… 2
	「不幸」という「精神の貧困」…………… 4
連載	或る運動者の回顧録〈第7回〉…………… 丹野 寛親…… 5
	「戦争」と「憎悪」を考える …………… 7
	本部、地方本部活動報告 …………… 9

発行所

中央情報通信社

主幹・編集長／谷田 透

本社 〒157-0065 東京都世田谷区上祖師谷2-5-24-103
電話・FAX (03)5313-0215
賛助購読料 年額 3,000円（年10回発行）
ホームページ <http://大日本生産党.com/>

1月22日
政治会議



トランプ大統領が世界大変動のスイッチを押した

本紙編集部

アメリカのエスタブリッシュメント(特定権力機構)の既得権益を没収して、新しいアメリカを作り上げる(伝統的なアメリカに回帰する)と高らかに訴えたトランプ大統領が、世界大変動のスイッチを押してしまったようだ。

軍需産業、マスコミ、金融会社、弁護士事務所、化学会社、石油会社、穀物会社、遣伝子操作会社、国家諜報部門系会社などアメリカの既得権益企業は、国内の雇用や景気には貢献せず、自分たちの収益と特権だけに汲々としてきた。それを叩き壊してくれるのはトランプしかない…とアメリカ一般国民が考えても無理はない。大手マスコミが報道する地域だけがアメリカではないのだ。

世界で最も苗字(ファミリーネーム)が多いのがアメリカで、その数は二百万とも言われる。これは世界中から移民が集まっている証明であり、主にヨーロッパ系の故郷を捨てた人々の子孫である。それらが土着して地域社会を作ってきたのが、伝統的中産階級のアメリカー人だろう。

多数の「今のアメリカは何だか変だ」と感じていた国民が、その原因を既得権益社会とエスタブリッシュメントに在ると考えるのは自然だ。だから、それをぶち壊すと宣言したトランプに魅力を感じたのである。ところが現実には、既得権益社会やエスタブリッシュメントの不満を爆発させてしまっても大変だし、一般国民の不満を爆発させても大変だ。弱い部分から順番に叩き潰すのが兵法の常道だろう。敗北者を下僕に従えるのも、戦国武将の掲げるロマンの大きさがなせる技である。

トランプ大統領は「弱い敵を叩くこと」と「自分の利益機構を確立すること」を急ぎ始めた。これが、世界大変動のスイッチに直結したようだ。

世論とスポンサーが横を向けば立ち行かな

いマスコミを先ず叩き、「面白い」というネタを供給することで逆に自分の宣伝をさせる下僕にさせた。

ロシアとの急接近を匂わせながら、二、三年の時間をかけて懸案事項を解決してから握手する…と修正することで右派を安心させ、ロシアとは水面下に直通パイプを確立した。

韓国には、次の政権が反米反日の左派政権になるのが確実なら、自由主義の砦である軍が立ち上がって戒厳令を布くのも選択肢だ…と教唆し、日米韓の軍事同盟推進を優先した。朴正熙の時代を再認識させようとしている。

韓国も一般国民の雇用や景気が沈滞して、一部の特権階級(両班/ヤンバン)だけが裕福なことが時限爆弾になっている。



中国に対しては、政治的・軍事的には正面からの対立の構えをしながら、経済的には共に発展しようと呼びかける。中国では、共産党と解放軍が完全に孤立し国民が見放せばアメリカの勝利だという観測があり、既に金満家たちはアメリカに軸足を移しつつある。中国大陸は所詮、アメリカから見れば「生産地と同時に消費地」にしか過ぎない。実は、これらのトランプ政策が巻き起こす影響が波状的に大きくなり、我が国もそうだが、対象者(国)たちは方針転換を急がねばならなくなった。

トランプ大統領の政策的方向性を決定付けたのが、父親の時代から世界ユダヤ人会議に関係していたことだと言われている。古い時代のユダヤ人会議は、アメリカの禁酒法時代に財を成した人達が支配していたらしいが、エスタブリッシュメントのユダヤ人とは一線を画していたようだ。

トランプ家には、成り金のユダヤ人新興財閥が入りし、長女イバンカも新興ユダヤ人財閥クシュナーの息子と結婚している。イバンカはユダヤ教に改宗したが、この結婚をプ

ロデュースした中国人女性**鄧文迪**はトランプ家の顧問格と言っても良い(写真上)。

習近平の中国では「反腐敗運動」が毛沢東時代の右派弾圧から文化大革命に発展した時のような、政敵を完全に葬る流れに変わってきた。それを察知した太子党の中核メンバーたちは避難し始めた。特に鄧小平の一族は二〇一四年にアメリカに財産ごと避難した。孫娘の夫婦(呉小暉と卓苒/写真下)は、ニューヨークに拠点を移してトランプ家と裏側で繋がっているようだ。



左からイバンカ、夫のジャレット・クシュナー、鄧文迪



鄧小平の孫娘夫妻(左から呉小暉と卓苒)

団結すれば引く、団結できなければ個別撃破して半島を侵略という駆け引きになる。習近平には「高句麗地域」が重荷になりつつある。イスラエルとパレスチナの関係も、西岸地区はヨルダンに、ガザ地区はエジプトに任せ、エルサレムは二〇三年の調整期間をおけば戦争にはならず、その間にIS(イスラム国)の壊滅戦争をする同盟国を集めてNATOの存在感も示させてやろうというトランプ周辺の考え方も、ユダヤ人新興財閥や華僑新興財閥と共に「アメリカンドリーム」を実現する近道と見える。

「得する人」と「損する人」が明確になるであろうトランプ大統領の政策は、トランプと握手する訳にゆかない人(国)にとっては、大変動の呼び鈴を鳴らす結果となる。波状的に不安や憤怒が広がれば、世界は大変動に突入するだろう。

それを解った上で、我々は今後の世界情勢を見る余裕を持ちたいものである。

トランプ政策によって、習近平は世界戦略の変更を余儀なくされているらしい。北朝鮮を利用する計画も転換し、日米韓が

稿「君は誰なのか」を考える時代になった

「兵庫通信」代表 村上 学

トランプ米大統領の「イスラム系七カ国からの一時入国禁止令」以降、国籍という問題で人々を分けることは是非を考えるきっかけになっている。

国連憲章では第一条「目的及び原則」として、「経済的、社会的、文化的、人道的な性質を有する国際問題を解決することについて、人種、性、言語、宗教による差別なく」と書かれているが、国籍による差別は、国際的な平和と安全を維持するために諸国間の友好関係を推進する上では当然のこととして扱われている。

これは重要なことであり、一般的に「民族・宗教・言語・国籍」による差別をなくそうと呼び掛けることと一致していない。その理由

を考えると共に、国籍の重要性を再考してみたい。国籍とは、その国家の構成員になるということであり、その国家・政府が国籍取得者(国民)の保証人になっているのである。だから国籍こそ、国際間では最も重視される「君は誰なのか」に答える第一回答である。

我が国に帰化する韓国人や中国人は多いが、筆者の知る限りほぼ全員が驚いているのは「国防の義務」が日本国民には存在していないことである。その国の構成員になるということは、その国、社会を守るために戦う義務を負うのが世界の常識だろう。その常識が日本には無い。これをアメリカに当てはめれば、アメリカ国民になった者、なろうとする者(永

住者)には等しく「アメリカ国防の国民義務がある」という認識でなければならぬ。そのアメリカ国民が、アメリカ国家社会に不利益を与え、また脅威を与える他国に味方する利敵行為に関わった場合、厳罰があつて然るべきだろう。

現在のアメリカ政府が大統領令によって、特定国籍者の入国を禁止するというのは「国防の義務」に当たり、逆に反対運動する国民が「入国を制限しないことが国防に有効」だとして反トランプを訴えるのもまた民主主義の姿だと言える。

これに対し、アメリカの国籍も永住権も有していない第三国人が、自分の国でもなければ自分の大統領でもない者に対して、現住国アメリカにおいて「国民の国防義務」に直結する問題に介入するのはおかしい。

◇ 我が国では、その出身、身分の貴賤などで差別することを卑劣とするが、国籍の問題を真剣に考えたことがほとんど無いのではなからうか。

日本が日清戦争に勝利して割譲を受けた台湾には、明治中頃になってから(風土病や首狩り族を平定してから)移民が始まった。本土の本州に対して台湾州として、日本国の地方に移住するようになると宣伝された。ハワイや南米への移住とは異なる。満州や朝鮮と同じ、或いは似ているものだろう。

日本国台湾州で生まれ育った日本人を「湾生(わんせい)」と呼ぶが、それらは昭和二十年の敗戦によって日本に強制送還された。両親の故郷には違いないが、本人にとつて縁もゆかりも無い日本に強制送還された「湾生」は一説に二万人と言われる。現地で台湾人と結婚して家庭を持つていた者は、そのまま台湾に住んだが、その子供たちは親の故郷である日本にやってきてルーツ探しをしている。



国籍は、戦争の戦利品として国土が割譲されたり略奪された場合、住み続ける者にとつては苦しい選択になるだろう。湾生は重大な

歴史の影の部分だ。

ハワイやロサンゼルスなどアメリカ国土に移民した日本人たちは、黄禍論による対日感情の悪化で、財産没収・ゲットー隔離という酷い仕打ちを受けた。その移民二世たちの多くは、もはや日本を故郷ではないと考えて、アメリカ軍の「日系人部隊」に志願した。ヨーロッパ戦線で、ユダヤ人収容所を命懸けで解放したアメリカ陸軍四四二部隊こそ、最も多くの死亡勲章をもらった日系人部隊だった。彼らの国籍はアメリカであり、日本はルーツというだけの存在なのである。国籍国に愛国心を持つことは当然であり、ルーツ国に愛国心を持つような国民は反逆者・利敵行為者となったのだ。



442部隊の元兵士たちは既に90を越える

今の日本国内を見ると、在日の韓国人や朝鮮人、そして華人や華僑の中国人の愛国心は何処にあるのだろうか? 日本に帰化した国籍取得者と永住権保有者は少し違うかもしれないし、外国人登録者や一時滞在者はまた異なるだろう。しかし、その愛国心や国防義務感が、どの国に根ざしたものなのかは重大だ。

中共政権は「世界中にいる中華民族には、中国を守る義務がある」とする**国防動員法**を制定しているが、これが世界の常識から外れていることは先の説明で理解していただければだろう。

「君は誰なのか」という問いかけには、その国籍を答えれば良いのか、人権や民族を答えるのか、宗教や言語を答えるのか、一定の正解は無いだろう。ある芸能人が「父親はアメリカ人で母親は韓国人で私は日本人だから、私のルーツは三つの国」と言っているが、別の者は「父親はイスラム教で母親はキリスト教だったが、日本に移住してから宗教を捨てて私が生まれた」と言う。

「君は誰なのか」と問う者と答える者の、単純ではなくなった時代の不確かさ、暗さは一層深くなるようだ。

「不幸」という「精神の貧困」

むすびの集ひ事務局

月刊「世界思想」二月号に、「障害者Ⅱ不幸」と誰が決めるのか」という特集記事が掲載されている。それは我々に「不幸」というものは何か？を問いかける意義深い企画だったと思う。

神奈川県重度障害者施設で発生した元職員による入所者虐殺事件を受けて、犯人が主張した「重度知的障害者は人間らしい生き方をしていない動物だから、安楽死させた方が世の中のためである」という考え方に、障害者（健常者ではない者）は幸福な人生を送れない「不幸な存在」だという決めつけが感じられる。確かに、障害者は不自由なこととは理解できるが、それが「不幸」と断定する根拠は何なのだろう。

この事件の犯人は、自身が健常者であり、世の中は健常者中心で運営されているので、障害者は阻害される要員になると信じているように思われる。

昨年、厚生労働省がダウン症の当事者に対するアンケートを実施しているが、その中でダウン症本人の九〇%が「毎日幸せを感じる」と答えていることが判った。一見この感覚は健常者にはなかなか理解しにくいだろう。

成人ダウン症患者の平均知能指数は五〇と言われており、軽中度の知的障害に相当するという。ダウン症という言葉は、イギリスのダウン医師が一八六六年に論文で発表した時から知られるようになったそうで、当初ダウン医師は「人種的に劣等なアジア人レベルで発達が停止する病気であり、（容貌も相俟って）モンゴリアン症だ」と名付けていたらしい。進歩的な優生保護という観念が、ダーウインを頂点とする劣等者への差別偏見を大きくした。ダウン症の子供たちは発育が遅く、知能的にも発達が遅い。しかし情緒的なものは別である。本人が「不幸」であると思わないことさえも、「不幸を感じないこと自体が不幸だ」と僭越な考え方をすること自体が「精神的貧困」に根ざしているのではないだろうか。

出産後、最初にダウン症を告げられた母親の気持ちは察して余りある。しかし運命的なものには逆らえない。運命的なものを受け止

めて乗り越えるか、押しつぶされて逃げ続けるのか、それは母親側に課された宿命的なものであろう。

「こんな子供は産まなければよかった」と考える「精神的貧困者」が母親である場合、子供は見捨てられ、本当の「不幸」になる。幸福か不幸かという数値化された理論など存在しない。物質的・経済的にも、欲望に支配される「精神的貧困者」以外は、基準的なものは存在しない。「不幸」は、精神に宿る病なのかも知れない。



二〇〇七年五月、熊本市に「こうのとりのゆりかご」という名の「赤ちゃんポスト」が開設された（写真）。全国から賛否両論の激しい論争が戦わされたことは記憶に新しい。様々な理由で捨てられる赤ちゃんは、果たして母親のどんな思いを背負わされているのか。

「赤ちゃんポスト」は二〇〇三年にドイツで発祥したもので、様々な要員により産まれた赤ちゃんを捨てなければならぬ（母親の理由で）時には、せめて赤ちゃんの生命を守るために「赤ちゃんポスト」に預けてほしいという福祉的発想から生まれた。



捨てられ死んでゆく赤ちゃんは、まさしく「不幸」である。捨てる母親の中には、強姦されて妊娠した、貧困のどん底に在る、先天的障害児である等々さまざまな理由があろう。しかし、赤ちゃんを捨てたことは母親にとって死ぬまで謝罪し後悔し続ける十字架となる。あの時、一步乗り越えていれば…と後で考えた時、母親は自身の「精神的貧困」に耐えられないだろう。

子供はどんな貧困家庭でも、温かい家庭で

育てば情緒豊かな社会人に成長する。逆に、どれほど裕福でも、不仲で思いやりの無い冷たい家庭に育てば、その子供は正しい道から逸れてしまうことが多い。

「不幸」とは何だろう。その基準にはまず「普通」「平均」という社会通念が在ることは容易に考えられる。周辺の多数が「普通」「平均」なのであり、皆と同じでなければならぬという強迫観念が心の中にある。それは「幸福」なことなのか。皆と同じならば、幸福になる時も不幸になる時も一緒だという錯覚がある



或る運動者の回想録(第七回)

丹野寛親



本年度になり最初の回想録となりました。第七回ともなると原稿の締め切り日が段々短く感じられる今日この頃です。

さて前回は、先輩パイロットや同乗して亡くなられた航空会社の職員の方々を取り上げて書いてみましたが、今回より訓練飛行も終盤となり数々の高度な飛行や超越飛行訓練のエピソードを振り返ってゆきたいと思います。飛行訓練も後半になると色々科目飛行も覚える行程が多くなり、四十才を過ぎた私には過酷となり、訓練が終わると帰宅に二時間半かかる道のりも苦痛となるのでした。

この頃になると一日当たり科目ごとに飛行訓練もハードとなり、オートローテーション訓練も本番さながらになり、通常の訓練でもイメージ的な練習飛行をしながらの行程は経験していたが、何せ戦闘ヘリの元パイロットが教官なのだ。経験豊かな教官は、私に本気で不測の事態に対する技術を身につけさせたいと思っていたようだ。しかし緊急着陸であるオートローテーションを実際にエンジンカットオフで訓練する場所は無く、当然空港施設はイメージ飛行が関の山だった。この訓練の目的は、飛行中エンジンストールに見舞われた時に、竹トンボの原理を応用した不時着訓練であるので、習得できれば幸いであるが、自衛隊専門の施設でなければ不可能だった。

遠藤教官より「丹野さん。オートローの訓練は空港施設周辺では限界ですが、場所を変

のではないか。社会が「運命共同体」である時、その理論は通用するのかもしれない。

筆者は「不幸とは精神的貧困、精神的未熟から生まれる恐怖心」だと思ふ。物理的・肉体的に歴然とした不幸であっても、当事者が不幸を感じないのであれば、それは「不幸」ではない。

我々は、「不幸」というものと「精神的な豊かさ」というものを考えるべき社会的な転換期に生きているのかもしれない。

えれば、実践さながらの経験ができますよ。」と言われてもピンとこなかった。

どうやら同氏は訓練課程の中で、私との関係が教官と訓練生を超えて自衛隊現職時の先輩と後輩のような感覚になられたようだった。普段は空港の滑走路を目標にして百八十度ターンしてエンジンはリカバリー状態に保ち、ヘディングを定点に向けて高度五十フィートで難着をイメージしてゴーアラウンドする。しかし同氏はこの頃から、何処か原野か人気のない原っぱないか…と考えておられた。

ある日のこと、いつものソロの訓練飛行をしようと準備していると「今日は私も同乗して、古巣の部隊基地へ行ってみましょう」と言われ、急遽フライトプランを変更し、同氏の現職時代のヘリ部隊基地へと向かった。さすがに現役を離れてまだ数年なので、基地の近くになると自衛隊専門用語の言葉でタワーと交信し始めた。基地の管制塔の相手は女性の声で、ときばきと交信してくる。しかし普段聞いていた無線とは多少違うので、ヘッドホンに集中して聞いていた。

やはり自衛隊は、超法規飛行をするだけあって、基地に進入する角度や速度も民間とは違うなあ…と感心していると、ヘリ部隊の基地らしくいろんな機体が見え始めた。着陸して格納庫に行くと、後輩隊員達が「隊長お久しぶりです」と次々に現われては敬礼してくる。

私は横着にも自分まで隊長気分で、敬礼してくる隊員に「おっ、ご苦労」と言わんばかりに居る始末であった。それから戦闘指揮所

に案内されてコーヒーをご馳走になりながら部屋に壁に目をやると、輸送機のイロコイスヘリが基地敷地内の芝生上で横転している写真に目が入った。

遠藤教官が「夜間訓練時のご愛敬ですよ」と言われたので、乗員の方は無事なんですかね？と何となく聞いてみたが「このくらいで殉職していたら、自衛隊は務まりませんよ」と、他の隊員と笑いながら答えられていた。

真相はハッキリしないが、我々が知らない高度なパイロットが居るのが自衛隊なのかと思ひ、頼もしく見えてくる。それから格納庫へ行き戦闘ヘリのハンターを眺めていると「操縦席に座って見ていいですよ」と言っていて頂いたので、初めて操縦席に座ってみた。座り心地は良く、よく見ると座席自体が防弾版で囲われていた。まさしく戦闘ヘリであると感じしてしまった。



訓練過程における遠藤教官（右）と筆者

暫く雑談していると、隊員達が教官に笑いながら「隊長、今乗って来られた耕運機みたいなヘリで普段は飛んでいるのですか（笑）」と茶化してくる。なるほど自衛隊の機体からすれば、我々が乗っているロビンソンR22等は大型トラックと耕運機ぐらいの差がある。そうして二時間ほど休ませてもらった。帰りに教官が現役隊長に「今度来るときは、私の訓練生にオートローテーションの実技経験を敷地内でやらせてくれよ」と笑い顔で言う。「先輩無理言わんでくださいよ。事故でも起きたら自分は終わりです」と内心思ったが口には出さなかった。かたや教官は半分真顔だったので、私は「この方の型破りな行動は現役時代から変わらないのか」と思いながら帰路についた。

さて訓練も大方の行程を消化していき、いよいよ実技試験を想定しての訓練飛行へと進んでゆく。この頃になると更に覚えることが

増えだし、もう、てんやわんやの事態であった。

以前ふれたように、私はこのとき既に四十三歳であり、航空大学を出たような若手との同時試験を受ける身なので条件的には不利であったが、覚えなければ受験できない座学の参考書を一枚ずつ飲み込む勢いで学習していた。すでに航空無線は合格しており、次に航空法規・工学等々の学科科目試験や、実機による実技試験へと順次科目行程の模擬試験は連日の特科となった。ちょうどその頃に自家用飛行機の実技試験を控えた訓練生（ここではA氏と呼ぼう）と座学室で一緒になることが多々あり、よく雑談を交わしていた。

そんな折に、A氏の模擬試験飛行があるので緊張する同氏を励まして見学することにした。ところがその見学で驚く事態となったのである。飛行機の教官は遠藤氏とは別の方（この教官をB教官と呼ぶ）である。入校当時から私も挨拶や雑談くらいはしていたが、余り飛行機の教官とは気心は知れてなくて、遠巻きのお付き合い程度である。

さてA氏が模擬試験は準備完了。B教官が私の駐機しているEエプロンから無線機を片手に、セスナに搭乗しているA氏にスタートコールした。私はヘリの操縦席に座って無線を聞いて勉強するつもりで周波数を合わせた。タワーと交信してデパーチャ、ランウェイコンプリート、ランウェイクリアー、テイクオフランディング：と出だしは順調に行っている。そして場周飛行してコースを消化しながらの科目飛行試験に移る。

最終アプローチへ向かうときA氏はタワーとの交信を忘れて滑走路へ。ヘディングを向けた瞬間にB教官から怒号が飛ぶ。「こらっ貴様、無線はどうした？それでも医者か！」と凄まじい怒鳴り声である。続いて「バカヤロ、さっさと降りてこい！」これには私もヘッドホン越しに聞いて驚いてしまった。その後A氏が着陸すると、B教官からこっ酷く罵声を浴びせられていた。暫くして座学室に戻るとA氏が落胆した様子で入ってきたので「大変でしたね。でもチャンスはまだありますよ」と言うのと、少し目つきが荒くなり「私も医者としてのプライドがあります。あそこまで言われて、これ以上ここで試験を受ける気はない

です。他の学校へ転学します」と勢い込み、私が何とか宥めてみたが全く聞こうとはしなかった。

結局同氏は即日退学され二度と戻って来なかった。一方怒鳴った教官の経歴を聞いてみると、元は海上保安庁のパイロットであったので、厳しくシゴいたのであろうが、A氏にとっては我慢の限界であったろう。気を引き締めて自分の模擬試験では落ち着いて受験しなければ…と思ったものである。

確かに現代社会の中では、我慢と辛抱、忍耐と努力という言葉はもはや化石に近いものである。元々日本人が欧州・欧米列強の世界

「戦争」と「憎悪」を考える

戦争とは必然でもなければ偶然でもない。当事者国家政府の「理由」によって始まる。戦争遂行には原則も理論も必要だが、目的は勝つことであって「平和」ではない。戦争には理論が必要だが、平和には理論は必要ない。平和とは戦争の要因が排除されている状態を言う。裕福・贅沢・便利・快適などが平和の基本ではない。平和とは、単に戦争をしなくて済む社会のことである。

戦争に突入すれば、愛国心が高められて様々なスローガンが民心を縛りつけるが、それらは往々にして「手段の目的化」になっている場合がある。戦争突入時には「やむを得ず」の部分が大きいが、どこで終結するのか想定していない場合は悲惨である。戦争遂行が目的化されてしまうからである。そのためには、敵に対する国民一丸となった「憎悪」が必要不可欠になってくるものである。

戦争を続けながら駆け引きするのは、大陸民族国家の常套手段である。海洋民族国家には耐え難いものだろう。大陸民族は罾を仕掛けるのも得意だが、海洋民族はゆめ罫に引き込まれて大陸奥深く入ってはならない。国防の要には、厳しい戦鬪力と明晰な頭脳と狡猾な外交力が欠かせない。

ヒトラーが国民の正当な選挙で選ばれて政権を取った背景には、第一次世界大戦で敗北し、戦後処理を巡って燃え上がるドイツ国民の復讐心があった。イギリスとフランスは滅

情勢に危機を感じ、明治維新後に急速に近代化や教育に関する改善を急ぎ、先の大東亜大戦の敗戦により我が国の歴史・伝統思想・教育等を破壊されて、自己中心的な民族に成り下がってしまったのが、前記に述べたような事態となったと思われる。こうした中で私が回想録を執筆しているのも、日本人の忘れてならない尊い歴史を再認識するものになればとの思いからである。

この回想録を読んで頂く皆様には、少しでも日本人として誇りと、何ものにも代えがたい民族精神の伝統とは何かを考えていただければ幸いです。

(次回へ続く)

チェコ映画「ニコラス・ウイントンと六六九人の子どもたち」を観て

ぼすべき巨悪であり、工業生産とは対極の商業と金融に特化して富を集積するユダヤ人は、中央ヨーロッパの原住民族ではないので放逐しなければならぬ、とヒトラーは訴え始める。

スラブ民族は劣等民族である、ジプシー民族は駆逐しなければならぬ…などと次々に周辺を「偉大で崇高なゲルマン民族」で統一しようと呼びかける。それがドイツ国民にはたまらなく甘美な響きだった。

ヒトラーは「ドイツ帝国の拡大」「第一次世界大戦の復讐」「世界制覇」の目標を掲げて、そのために「憎悪」を作り出すことに成功する。ドイツ人がユダヤ人を憎悪するようにさせるのである。そしてナチス党は中央ヨーロッパに進撃するに併せて、そこにいるユダヤ人から財産を没収して放逐するようになる。戦争が沸騰すると、ユダヤ人は強制収容所へ集めて「民族消滅」が図られる。繰り返すが、このナチス党もヒトラー総統も「ドイツ国民が正当に選び、喜んで従った」という事実を忘れてはならない。ドイツ国民に結果責任を負わせることは簡単かもしれないが、人は「積年の恨みに、憎悪のプロパガンダで火を点けると爆発は連鎖拡大する」ということである。

先日「ニコラス・ウイントンと六六九人の子どもたち」というチェコのドキュメンタリー映画を観たが、この映画は「戦争」「憎悪」に

ついで示唆に富むものだった。

ニコラスというイギリス人の青年が、大恐慌時代に株でボロ儲けして成り金になったが、戦争の足音が近づいてきた時にスキーに行く約束をしていた友人から「チェコのユダヤ人がナチスに迫害を受けているので、それを助けるボランティアが忙しい」と連絡が入り、面白そうなので彼は単身チェコに行ってみることにした。彼が宿泊するホテルに「子供だけでもイギリスに逃げさせてくれ」と懇願するユダヤ人たちが列をなす。彼は「不可能に思える事でも、強い意志があれば道は開ける」をモットーにしていたので（その上、成り金だったし）、興味本位で引き受ける。

子供たちの写真でリストを作り、イギリスの里親を探してマツチングし、ナチスに金を払って子供たちをイギリス行き列車に乗せた。資金は全て彼の自腹だったが、途中で引き下がるのが出来なくなり、第二次大戦の開戦前日までイギリスの里親にユダヤ人の子供を送り続けた。その数、六六九人。

彼に助けられた六六九人以外の子供は、両親と共に強制収容所のガス室に送られた。

戦時中にイギリス空軍に従軍したニコラスは、チェコでの出来事を誰にも話していなかったが、戦後五十年を過ぎた頃、彼の妻が屋根裏部屋で不思議な古いスクラップ帖を見つけた。そこにはユダヤ人の子供たちの写真やリストと共に、ナチスの通行許可証やチェコからの手紙などが無数に入れられていた。妻は彼に問いかけるが、「終わった話だ」と多くを語らない。

このスクラップ帖がイギリスのBBC放送に渡り、BBCでは六六九人の行方を探したところ、二五〇人以上の生存者が確認できた。BBCでは特番を組み、ニコラスを客席に坐らせて司会者がチェコでの出来事を語った。そして唐突に客席に向かつて「この中で、彼に命を助けられた人は起立して下さい」と呼びかけると、何と



彼の周りの人々が全員立ち上がったのである。「愛」とか「勇氣」と讃える人に対し、彼は全く誇ることもせず、自分が物語の登場人物になっただけの昔話だ……と答えている。

エリザベス女王は緊急に彼にサーの称号を直接授与し、ローマ法王もダライラマも最高の敬意を表明した。ノーベル平和賞にもノミネートされ、世界は彼の隠れた偉業と善行に震えた。彼に続けと、難民救済運動は活発化した。



ニコラス・ウinton氏(右)

だが、彼は「私がチェコのユダヤ人の子供たちをイギリスのキリスト教の里親に預けていることを、ユダヤ教のラビたちは抗議しにきた。ユダヤ人をキリスト教徒にするつもりか」と。私は答えた、子供たちの命とユダヤ教と比べるつもりか」と想い出を語り、頑迷固陋で原理原則に呪縛されるユダヤ教のラビを非難している。

「憎悪」を沸き立たせれば、それは「怨念」となつて消えることはない。反復継承され拡大してゆけば、最初の「理由」から懸け離れて「目的」に変わってしまう。

「戦争」に利用する近道として作り出した「憎悪の構図」は、戦争が終わった後も一人歩きする。戦争に勝利する道具だったはずの「憎悪」は目的化され、片棒を担ぐ結果となった国民はアイデンティティを喪失する危険性に遭遇することとなる。

ニコラスは二年前に一〇六歳で亡くなったが、彼に命を助けられた人達は彼の恩を語り継ぎ、子供や孫たちも彼の恩を別の困っている人々に返そうと務めている。日本に残る美しい作法である「恩送り」が、ユダヤ人の子孫に受け継がれている。

戦争は国家政府の「理由」によって起きるものであり、国民の愛国心を沸き立たせるために、敵に対する「憎悪」を燃え上がらせる。そこに思想的・政治的なプロパガンダを定着させ、戦後になつても「憎悪」は残る。憎悪を受けた側には「怨念」が残る。それが繰り返されれば、敵対者の殲滅や浄化が正しい考え方だという世代が生まれる。最初の段階の「理由」を知るはずのない世代である。攻める

側の「憎悪」と受ける側の「怨念」の、終わりに無き連鎖が始まるのである。

今、自国民の「憎悪」をかき立てて、抗日運動を再燃させる「理由」を持つ中国や韓国

本部、地方本部活動報告

■本部、関東・東北本部

◇一月二十二日(日)

・午後〇時五〇分より、京都市南区「京都テルサ」において本年第一回政治会議を開催した(写真)。出席者は鴨田最高顧問、丹野党首、阿部副党首、杉山党首代行・書記長、花田書記長代行、谷田副書記長・機関紙編集長、オブザーバーとして堤九州本部長、佐伯九州事務局長の八名。

丹野党首による挨拶に始まり、進行は阿部副党首。議題は主に昨年の活動報告と今年の活動計画。とりわけ安倍政権の対露、対中、対韓外交の軟弱性に対し抗議要請書を送付することを検討、決定した。

また、かねてより杉山党首代行・書記長・機関紙主幹が役職の辞任を希望していたが、それが承認され改めて副党首に任命。本部役員は新たに党首代行として堤一清、書記長・機関紙主幹(編集長兼務)に谷田透、党首秘書長(書記長代行兼務)に花田凌、副書記長(党首秘書兼務)に佐伯哲也、副幹事長に山田誠、幹事に三浦正人、野崎伸也各氏を任命することを確認。新総務任命も併せて次期総務会を以て追認を諮ることとなった。

会議は五時に終了、食事を共にし六時に終了した。

◇二月六日(月)

・政治会議の決定に従い、党本部より内閣総理大臣安倍晋三氏宛てに「内外における国難課題に対する抗議及び要請書」を送付。本文はホームページを参照して頂きたい。

■関西本部

◇二月十一日(土・祝)

・午後一時二十分より、奈良檀原神宮にて「紀元節奉祝・檀原神宮参拝」を行なう。党員・有志やその家族ら約二十名が参加(写真)。阿部関西本部長による代表参拝・玉串奉奠、谷田兵庫支部長による祈願文奉読。同神宮参集殿にて直会を行ない、午後二時半頃終了、解散した。

【祈願文】

建國紀元の佳節に當たり、大日本生産黨関西管下の黨員有志一同、檀原神宮の御神前に、謹みて、皇國日本の彌榮を祈願し奉る。

嘗て「水と安全は無料」と揶揄された時代が在つ

には、日本の「怨念」が数百年続くという事実を教え、「戦争」に突入する愚かさを嚴重に警告しておかねばならない。「憎悪の連鎖」が続けば、両国の国民は永遠に恩讐を越えることは出来ない。

たが、わが国内には未だ「安全保障」を「戦争」と言ひ換へる太平樂な一團が存在する。それを後目に、今やわが尖閣諸島は、中國海上民兵の侵入を明日受けても不思議ではない。片や中東で過激勢力を相手に連日血を流してゐる米國軍人が、誰一人住む者もない尖閣諸島で戦ふ道理のあらう筈は無く、況や合理主義の信奉者トランプ政権下ではあり得ない。わが國は一日も早く自力で國土を護る必要に迫られてゐる。

一方わが國內では、民進黨が黨首に二重國籍者を選出した事で、既に野黨が國政に關する責任能力を放棄したかのやうである。かかる獨り勝ちの情況に胡座をかか現安倍政権には緊張感が喪はれ、可能な筈の憲法改正もせず、被拉致日本人は未だ獨りも還らず、北方領土問題は五里霧中である。更に中國人不法入國者の巢窟である所謂「民泊」の存在に對し、それを認可するやうな方針を政府が推し進めた結果、世界一安全を誇つた地方自治は崩壊を始め、いまや國家共同體の根底を搖るがす事態を招來しつつある。また外國人による土地取得にも未だ法的制限が無く、このままではわが國は内部からの瓦解を避けられないであらう。

かくて民族の觸角として我等の責務は重且つ大なるものがある。

此處に我等在野有志は決意を新たにし、夷敵を討ち拂つて維新日本の建設のために努力、邁進することを御神前に誓ひ、以て皇國の彌榮を祈願し奉る。

皇紀二千六百七十七年 平成二十九年二月十一日

大日本生産黨関西本部

◇一月八日(金)

・午後六時半より尼崎にて「むすびの集い」勉強会。党員、有志計八名参加。資料は「今年は何値観転換と世論激変に振り回される」ほか。

◇三月三日(金)

・午後六時半より尼崎にて「むすびの集い」勉強会。党員、有志計八名参加。資料は「トランプ大統領の周辺事情」「北朝鮮を巡る國際情勢のポイント」「赤ちゃんポスト」運営上のポイント」ほか。

